

# 統一思想における人間の起源

ジョナサン・ウェルズ  
第18国際統一思想シンポジウム  
東京 2006年12月

## 要約

統一思想の中心的な目標は、宇宙の創造とデザイン、特に、人間のデザインおよび創造を理解することである。現在、科学者の中で支配的な見解は、ダーウィニズムであり、それは(人間を含む)すべての生き物は共通の祖先の変形した子孫であり、生き物のすべての様相はランダムな突然変異に作用する自然選択などの導かれない過程によって生まれたという信念である。もしダーウィニズムが真理であるとしたら、神はデザインによってアダムとエバを創造したのであり、彼らの墮落がこの世界に悪を導入したのだという統一教義は偽りであるということになる。化石の記録は、現在絶滅している類人猿のような生物が最初の人間以前に存在していたという証拠を提供するが、その証拠は、新しい種や体の構造は自然選択や変異といった導くもののない過程に由来するものであるという、ダーウィニズムの主張を支持するものではない。統一思想は証拠とも一致し、かつアダムとエバの創造における神の役割とも一致する妥当な説明を提供することができる。

---

ジョナサン・ウェルズ：

1978年、アメリカ・ニューヨーク州にある統一神学校を卒業。

1986年、エール大学で神学博士号を取得。

1994年、カリフォルニア大学バークレイ校で生物学博士号を取得。

著書：

『チャールズ・ホッジのダーウィニズム批判: 19世紀の論争の基礎となる概念の歴史的・批判的分析』(エドウィン・メレン・プレス、1988年)

『進化のアイコン: 科学か神話か? ——我々が進化について教えることの多くは間違っている』(レグネリ出版、2000年)

『ダーウィニズムとインテリジェント・デザイン論の政治的に不公正なガイド』(レグネリ出版、2006年)

現在、アメリカワシントン州シアトルにあるディスカバリー研究所の上級研究員。

## 1. 序論

統一思想の目標は、神の下における世界平和のための哲学的かつ科学的な基礎を提供することである。このためには統一思想は、宇宙、特に人間のデザインと創造の方法を、論理的かつ科学的に明確にしなければならない。統一思想によると、「今日、人類は神が約束された理想世界を実現する時を迎えようとしているが、そこにおいて最大の障害となるのが進化論なのである。」<sup>1</sup>

「進化」とは、最も広い意味においては、単に時間の経過と共に変化することを指すこともできるが、これは問題ではない。正気の人であれば、誰も時間の経過とともに生物が変化した現実を否定する者はいない。神の下の世界平和への障害は、チャールズ・ダーウィンの（オリジナルおよび現代の）生物進化論である。「ダーウィニズム」とはこれをいう。

ダーウィニズムによると、すべての生物は、ランダムな変異や自然選択といった、導かれないプロセスによって変化した、共通の祖先の子孫である。（ダーウィニズムの現代版では新しい変種はDNAの突然変異によって生じたと言われる。）この説の論理的な結果は、人間は導くものがない自然的な過程の、偶然の副産物であるということになる。人間はデザインされたか、計画されたように見えるかもしれないが、これは単に幻想にすぎない、ということだ。

それとは対照的に、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教などの伝統的な有神論の宗教の見解では、人間は神の似姿にデザインされて創造されたというものである。もしダーウィニズムが真理であるとすれば、この見解は偽りということになる。本当に、もしダーウィニズムが真理であれば、聖書の神は存在しないし、神の下での世界平和を実現するという目標は達成不可能である。しかし果たしてダーウィニズムは真理であろうか？ 証拠を見てみることにしよう。

## 2. ダーウィニズム

ダーウィン主義者は、彼らの見解を支持する圧倒的な科学的証拠があると主張する。しかし、彼らのいう「圧倒的な証拠」は、ほとんど(a) 生きている、あるいは化石の、種の中の類似性(相同)、および(b) 現存する種の内部での小さい変化（「小進化」）、からのみ成るもので、これらのどちらもダーウィンの理論を支えるものではないのである。

### 2a. 相同 (Homology)

ダーウィン以前の生物学者は、生物を種や属(genera)や、さらに高い分類学的カテゴリに分類するために、生物の類似点と相違点を用いた。(例えば、両方とも脊椎動物であるコウモリと鳥の翼の骨の)構造と位置の類似性は、機能の類似点(例えば、コウモリと蝶の羽、一方は脊椎動物で、他方は無脊椎動物)よりも、分類する上でもっと信頼できる特徴であると考えられた。前者は「相同」(homology)と呼ばれ、後者は「相似」(analogy)と呼ばれた。

ダーウィン以前の生物学者たちは、相同 (homology) を共通の原型 (archetype) またはデザインに帰する傾向があった。それとは対照的に、ダーウィンは相同を共通の祖先に帰した。彼の理論によると、コウモリと鳥の翼の骨が似ているのは、両方の動物が同じ生物の子孫であるからというのである。ダーウィン以来、進化論生物学者たちは化石と生物を、ダーウィニズムが規定する祖先と子孫の系統樹のパターンに組み入れるのに、相同を根拠にしてきた。

ダーウィンの『種の起源』に中の唯一のイラストは、彼が「偉大なる生命の木」と呼んだ図である。その図の一部を以下に再生する。縦軸は時間を表し、下へ行くほど古いことを示す。ダーウィンが説明したように、最も低い点は単一の先祖の種を表し、その中にはいくつかの変種 (varieties) (そのすぐ上に縦に分岐している線) が含まれる。(最初の横線で示される) 何千何百万世代の後に、この単一の種の変種は2つの種になり、それが時間の経過とともに異なる属、科、目、その他、へと分岐し続けていって、木の一番上にあるような最も異なるものになった、というのである。

#### 図1. ダーウィンの『種の起源』4章に掲載の「偉大なる生命の木」の一部

ダーウィンは次のように書いている。

「自然選択説によれば、あらゆる現生の種は、おのおのの属の祖先種と、今日同種の変種間で見られる差異より大きくはない差異によって、連結されているのである。そして、今は一般には絶滅しているこれら祖先種は、これもまた、より古い種と同様にして連結されており、このようにして、おのおのの大きな綱の共通祖先にしないで集約されていきつつ、さかのぼっていくのである。それだから、あらゆる現生種および絶滅種の間における中間的で移行的な環の数は、想像もつかぬほど多かったに違いない。」<sup>2</sup>

しかし、ダーウィンは、そうした過渡的な環 (リンク) は化石の記録の中には見つからないことを認めていた。ダーウィン理論を批判する人は、失われた環の問題を例証するために、しばしば鯨を指摘してきた。化石記録は、魚が動物に先行し、陸上動物が鯨に先行したことを示している。従って、ダーウィン理論によると、鯨は陸上動物に由来するに違いない。しかし、何年もの間、陸上動物と鯨の間にはいかなる中間物の証拠もなかったのである。

しかし、近年になって、陸生哺乳動物と現代の鯨の中間的な特徴をもったいくつかの化石が発見された。1994年、ハーバード大学の進化論生物学者のステーブン・J・グールドは、これらを「進化論者が発見することを望み得る最も甘美な一連の過渡的な化石」と呼んだ。<sup>3</sup> (図2)

しかし、(カリフォルニア大学) バークレー校の古生物学者ケヴン・パディアンが指摘するように、これらの動物はすべて、「他の知られている形態の直接の先祖と考えられるためには失わなければならないはずの顕著な特徴を持っている」。<sup>4</sup> 言い換えれば、そうした「中間的な形態」は付随的な分枝 (branch) であって、過渡的なリンクではないのである。(図3)

たとえそれらの化石が、過渡的な形態とは考えられないような特徴を持たなかったとしても、ダーウィンの進化論を実証することにはならないであろう。オハイオ州立

大学の生物学者であるティム・ベラは、進化論批判に反論するために1990年に書いた本の中で、偶然にもこのことを示した。ダーウィンの「変化を伴う血統的下降」という理論の証拠を、いかに化石記録が提供しているかを例証するために、ベラは、コルベット製自動車の様々なモデルの絵を使用した。(図4) ベラは次のように書いた。

「1953年型のコルベット車と1954年型のコルベット車を綿密に比較し、次に、1954年型と1955年型を比較する、というように続けていくなれば、変化を伴う血統的下降という理論は圧倒的に明白である」と。<sup>5</sup> しかしながら、圧倒的に明白であるのは、自動車はデザインによって作られる、ということである。実際には、コルベット製自動車は、ベラが意図したこととは反対のこと、すなわち、類似性の継承はそれ自体ではダーウィンの進化論の証拠を提供するものではないということ、を証明するものである。一連の中間的化石も等しくデザインの製品であり得るのである。

実際、化石を先祖—子孫の関係に配置するのは、原則として不可能である。二人の人間の最近の骸骨が掘り出されたと想像して見たらよい。文書記録と識別マークがなければ、この2つの骸骨がお互いにどのような関係にあるかを言うのは不可能である。(唯一の例外は、もしそれらの骸骨からDNAを抽出することができて、それらが同一であることがわかった場合には、それが一卵性双生児であると言えるであろうということだけである。)

しかも人間は同じ最近の種から来ている。遠い過去に、何百万年も離れた時代に生きていた異なった種の化石があったとしても、それらの間の生物学的関係を確立することは不可能である。「ネイチャー」誌の科学部門の主筆であるヘンリー・ジーが1999年に書いたように、「出生証明書と一緒に埋められた化石というものはない。」実際、「化石を隔てる時間間隔は非常に大きいから、それらの間の祖先と子孫の関係に関しては、はっきりしたことは何も言うことはできない」のである。「一連の化石を取り上げて、それらが一つの系統をなしているという主張は、テストできる科学的仮説ではなく、寝物語と同じくらいの正当性しか持たない」と、ジーは結論している。<sup>6</sup>

**図2.** 古代の陸上哺乳動物(下)と現代の鯨(上)の間の中間的な化石を示すシリーズの一部。(イラスト提供：ルーシー・P. ウェルズ)

**図3.** グールドが「進化論者が発見することを望み得る最も甘美な一連の過渡的な化石」と呼んだものは、実際には、付随的な分枝であって、先祖と子孫のリンケージの一部ではない。疑問符が示すように、それらの実際の関係は未知である。

(イラスト提供：ルーシー・P. ウェルズ)

**図4.** ベラの大失敗。

変化を伴う血統的下降というダーウィン理論を例証していることになっているが、実際は累進的なデザインを示しているに過ぎない一連の自動車モデル。

(イラスト提供：ジョディー・F. シェーグレン)

ジーの結論はすべての化石に適用するが、彼は特に、古人類学——人間の起源に関する学問——について書いていたのである。現代の鯨の進化を示していると思われる化石に比べて、現代の人間の先祖と思われるサルのような動物の化石はまれであり、また断片的でもある。「サイエンス」誌の記者コンスタンス・ホールデンが書いたように、「一次資料としての科学的証拠は哀れなほどにわずかな骨であり、これ

らの骨から人間の進化の歴史を構成しようとしているのだ。ある人類学者はこの仕事を、ランダムに選んだ13ページでもって『戦争と平和』の筋書きを再構築しようとする仕事にたとえている。」<sup>7</sup>

このように、古人類学者のミシア・ランドーによれば、「最近の古人類学の論文に見られるテーマは、…化石の研究だけから推論できることをはるかに超えており、実際、そのような化石の記録に対して解釈の重荷を課すものであり、この重荷は、あらかじめ存在する物語構造の中に化石を置くことによってのみ、軽減することができるものである。」<sup>8</sup>

あらかじめ存在する物語とはダーウィニズムのことである。人間の起源に関するダーウィニズムの物語は、化石から出て来るものではない。それは始めから真実であると想定されており、化石は、本質的に神無き創造の教義にすぎないダーウィニズムを例証する窓飾りとして用いられているのである。\*

## 2b. 小進化(Microevolution)

ダーウィニズムのいう証拠の第二の主要なカテゴリーは、小進化、すなわち存在する種の内部での変化である。これまで誰も小進化を疑った者はいない。実際、人々はダーウィンよりずっと前からそのことについては知っていたのである。しかし、ダーウィン主義者は、小進化がもし十分な時間を与えられれば、「大進化」(macroevolution)——新しい種や器官や形態の起源——へと導くであろうと主張する。

1937年に、進化論生物学者のテオドシウス・ドブジャンスキーは、小進化と大進化を連結するための確実な証拠はない、と述べた。「大進化的変化には地質学的スケールの時間を要するので、人間の生命の長さの中で観察できる小進化のプロセスを十分に理解することを通じてしか、そのような変化のメカニズムの理解に向かう道はない。このため、我々の現在の知識水準においては、不本意にも、大進化と小進化のメカニズムが同じであることにしなければならず、この仮定に従い、この仮定が許す限りにおいて、我々の研究を押し進めなくてはならないのである。」と彼は結論したのであった。<sup>9</sup>

そのように、ドブジャンスキーは、小進化の過程は大進化を説明するのに十分であると仮定しただけなのであって、それ以来、彼の仮定したことは科学的に論議を呼んできたのである。1940年、バークレー校の遺伝学者リチャード・ゴールドシュミットは、「小進化の事実は大進化の理解には十分でない」と主張し、「小進化は種の境界を超えたところへ導くものではない」と結論したのであった。<sup>10</sup>

1996年に、生物学者のスコット・ギルバート、ジョン・オーピッツおよびルドルフ・ラップは、「発達生物学」誌の中で、「遺伝学は小進化について説明するのには十分かも知れないが、遺伝子頻度 (gene frequency) の大進化的な変化が、爬虫類を哺乳動物に、魚を両生類に変えることができるとは証明していない。小進化は、適者生存への適応については面倒を見るが、適者到来については面倒を見ない」と書いた。

\* 同様の批評は、仮定的な進化の諸関係のダイアグラム (分岐樹形図) を作成するのに分子を使用するやり方に対しても適用される。(付録 I を参照)

そして2001年、生物学者のショーン・B. キャロルは「ネイチャー」誌で、「進化生物学における長年の懸案は、現存する個体群や種に見られるプロセス (小進化) が、

より長い期間にわたる生命の歴史に見られるより大規模な変化（大進化）を説明するのに、十分であるか否かという問題である」と書いた。<sup>11</sup>

ギルバート、オーピッツ、ラッフおよびキャロルは、小進化と大進化をめぐる論争は究極的には、ダーウィニズム理論の枠組みの中で解決するであろうと信じている。しかし、この論争が将来きっと解決するという彼らの信念にもかかわらず、ダーウィンが『種の起源』を出版してから150年後の今日でも、依然として存在しているのである。そして、それが存在している理由は、「進化の決定的証拠」が依然として見つからないからである。

進化の決定的証拠とは、種の形成(speciation)、すなわち、種の起源のことである。1859年の自著の書名にもかかわらず、ダーウィンは自ら「神秘の神秘」と呼んだものを解決しなかった。1997年に、進化生物学者のキース・スチュワート・トムソンは、「生物学者にとって未完了の仕事は、進化の決定的証拠を突き止めることである」そして「その決定的証拠とは種の形成であって、個別的な個体群の適応や分化ではない」と書いた。ダーウィン以前のコンセンサス（一致した見解）は、種はある一定の限界の中でのみ変化することができるというものであった。事実、何世紀にもわたる人為的淘汰は実験的にそのような限界を示していたように思われた。「ダーウィンはそのような限界は破壊され得ることを示さなければならなかった。私たちがそうしなければならぬのである」とトムソンは書いている。<sup>12</sup>

交雑と染色体の倍数化による種形成は植物においては観察されてきたが、進化生物学者のダグラス・J・フツイマが指摘しているように、この「二次的な種形成は主要な新しい形態学的な特性を付与することはなく、新しい属や生物学的ヒエラルキー（階層構造）のより高いレベルへの進化を引き起こすものではない」のである。ダーウィニズムは、一つの種が二つの種に分かれ、それらが何度も分枝し続けるという「一次的種形成(primary speciation)」に依存している。フツイマによると、そのような枝分かれする種形成は小進化と大進化の間の「境界に立つ」ものであり、ダーウィンの生命の木（系統樹）の「必須条件」である。<sup>13</sup>

一次的種形成は進化の決定的証拠となるであろうが、観測されたことはないのである。イギリスのブリストル大学の細菌学者アラン・リントンは、一次的種形成の直接的な証拠を求める研究の結果、「一つの種がもう一つの別のものに進化することが示された文献は何一つ存在していない。最も単純な形の独立した生命体であるバクテリア（細菌）は、一世代の時間が20～30分であり、18時間後には個体群となるので、この種の研究にとっては理想的であるが、150年の細菌学の歴史を通して、ある種のバクテリアが別の種に変化したという証拠は全くないのである。…最も単純な形の単細胞生物の間でさえ種の変化の証拠は全くないのであるから、（例えば、バクテリアなどの）原核生物から（例えば、植物や動物などの）真核生物への進化の証拠が全くないのは驚くべきことではない」と2001年に結論した。<sup>14</sup>

1930代にダーウィニズム進化論がメンデルの遺伝学と統合して以来、大進化は遺伝子の変化によって説明できるのではないかと期待されてきた。しかしながら、驚いたことに1980年代に、分子生物学者たちは、根本的に異なる動物が非常によく似た発達遺伝子を持っていて、哺乳動物のその遺伝子と昆虫のそれに当たる遺伝子を取り替えることができることを発見したのである。例えば、マウスの目の発達に必要な遺伝子が、ショウジョウバエの胚の目の発達を引き起こすことができるのである。<sup>15</sup>

しかし、マウスの遺伝子によって発達が引き起こされたショウジョウバエの胚の目は、マウスの目でなくショウジョウバエの目である。従って、ハエをハエに、マウス

をマウスしているものは、それが何であれ、彼らが共有している発達遺伝子ではないのである。これは遺伝子で進化が説明されると主張するダーウィニストにとっては深刻な問題となる。イタリアの遺伝学者でダーウィニズム批判者のジュゼッペ・セルモンティが2005年に書いたように、「なぜハエは馬でないのだろうか？」<sup>16</sup>

ダーウィニストは、すべての種は共通の祖先から変異や選択によって生じた子孫であると主張するが、彼らはただ一つの種でも、このようにして生じたことを示す観測された例を指摘することはできないのである。その上、発達遺伝子について我々が知っているすべてのことは、一つの結論を指している。すなわち、我々がサルの子孫に似ることをしようとも、その結果として起こる可能性のあることは、3つしかない。すなわち、正常なサル、欠陥のあるサル、または死んだサルのいずれかあって、新しいサルの種すらできることはなく、人間になる可能性は全くないのである。

### 3. 統一思想

統一思想は文鮮明師の教えの哲学的な体系化である。生物の起源に関する統一思想の見解は、『統一思想要綱』(1991)の中で説明されている。それは『進化論から新しい創造論へ』(1996)の中で要約された形で繰り返されており、ダーウィニズムの批判も合わせて述べられている。この論文で以下に述べることは、これら2冊の本と文鮮明師の1965年の言葉の非公式のノート(Appendix IIに抜粋を収録)、および李相軒先生からジョナサン・ウェルズ宛の1977年の手紙(その関連部分はAppendix IIIに収録)に基づいている。<sup>17</sup>

#### 3a. 創造の順序

創世記の第1章によると、神は宇宙と生物を6日間で創造した。しかし、宇宙学や地質学のような分野からのデータでは宇宙は約140億年前、地球は約45億年前にできたことを示している。統一思想はこれらのデータを受け入れて、創世記の一日とは象徴的な表現であると解釈する。1965年、文鮮明師は次のように述べた。「聖書では一日は1,000年のようなものであり、1,000年は一日のようなものである。しばしば、神によって啓示されたことは、文字通りの真実ではなく、象徴的である。」(このことは、アダムとエバ、ノアとその家族、アブラハム、イサク、ヤコブなどについての聖書の説明は真実でないということではなく、年代に関する聖書の言葉が必ずしも文字通りであるというわけではないという意味である。)<sup>18</sup>

化石の証拠は、地球上の生命が約35億年前に原核生物(バクテリアのように、核のない細胞から成る単細胞の生命体)から始まったことを示唆している。真核生物(核がある細胞を持つ生物)はその約10億年後に現れた。さらに、その約20億年後に多細胞の海洋動物が現れた。その後、地上植物、両生類、爬虫類、哺乳動物、霊長類、そして最後に人間が現れた。

ダーウィニズムは、各段階の生物はその前の段階の生物から、ランダムな変化や自然選択など導かれない過程によって変形されて現れてきた、と主張することによって、この秩序ある進行過程を説明する。人間はこれらの過程の偶然の副産物であって、計画されたものではないという。しかし、統一思想によると、人間は始めから計画されたものだというのである。<sup>19</sup>

ダーウィン主義者の中には、全能の神ならすべての生物を即座に現在の形に創造す

ることができたであろうから、化石の記録に見られる進歩は、神が関わってはいなかった証拠である、と反対する者もいる。しかし、この結論はあとが続かない。もし神が自由に万物を即座に創造することができたとすれば、自由に万物を段階的に創造することもできたであろうからである。

統一思想は、化石証拠を額面通りに受け取る。そして神は後者を選んだのだと結論づける。問題は何故そうしたのかということである。

その答えは、関係性、すなわち、統一思想が「授受作用」と呼ぶものである。<sup>20</sup> 愛は孤立して存在するのではなく、関係に依存する。神は人間と、愛を授受することができるように、人間を自己の子供として創造した。しかし、人間が神の子供であるためには、人間は何らかの意味で、神と同格でなければならない。神の自由と創造性を共有しなければならない。さもなければ、人間は神のおもちゃかペットか奴隷以上のものであることはできない。そして、人間が神の自由と創造性を共有するためには、真の自由を与えられねばならない。すなわち神と関係を持つか否かを選び、それによって、自分自身の道徳的かつ霊的な発展に参加することのできる成長期を与えられなければならない。従って、神はその本来の計画を実現するために、人間を未熟で未完成の状態に創造しなければならなかった。このパターンは類比的に全宇宙に拡大された。

李相軒先生は1991年に次のように書いている。「宇宙を創造する前に、初めに神は神自身に似せて、創造しようとする人間のイメージを心に描いた。それから、人間のイメージを標本として、それに似せて、様々な被造物の構想を描かれたのである。」かくして、人間とその他の生物の間に明らかな類似性があるのは、ダーウィン理論が主張するような共通の先祖の故ではなく、共通のデザインの結果なのである。「神は人間の表象を標本として動物の表象をつくり、次に動物の表象を標本として植物の表象をつくり、さらに植物の表象を標本として鉱物の表象をつくられた。このように、神の構想の過程においては、神は先ず人間を構想し、次に動物、それから植物、そして最後に鉱物を構想された。しかし、現実世界の創造は表象の形成とは逆の方向から行われた。」言い換えれば、創造のデザインはトップダウンで構想されたが、現実化はボトムアップでおこなわれたというのである。これは「創造の二段構造」と呼ばれる。<sup>21</sup> (図5)

神のデザインをボトムアップで実現した一つの理由は、人間に安定した環境を提供することが必要だったからである。原始的な生物は、不毛の惑星を動植物を支える地球に変えた。それにより、今度は自己を支え、人間に栄養を与える食物連鎖を形成したのである。<sup>22</sup>

神が創造したすべての生き物が現在まで生き残るように意図されたわけではなかった。統一思想によると、「万物のうちで人間の生活環境として準備されたものは、そのまま今日まで残ってきたのであるが、人間をつくる過程、あるいは人間の生活環境をつくる過程においてのみ必要であったものは、その過程が過ぎ去るとともに消えて行った。猿と人間の間の中間的な特徴を持っていた猿人や原人は人間を創造する過程においてのみ必要であったので、人間の創造とともに消えていったと考えられるのである。」<sup>23</sup> しかし、何故か？

人間



動物  
植物  
原生生物  
バクテリア  
鉱物

(i) 被造物が構想された順序

人間  
動物  
植物  
原生生物  
バクテリア  
鉱物

(ii) 創造が実現した順序

## 図5. 創造の二段構造

神様は最初に自己のイメージに合わせて人間を構想し、次に、そのイメージから抽出してその他の生き物とそれらを構成する要素を構想した。それから神はそれとは反対の順序に被造物を創造し、最後に人間を創造した。

減少する複雑さ      増加する複雑さ

### 3b. 神が人間を創造した方法

1965年、人間の起源について尋ねられたとき、文鮮明師の答えは、(その非公式の翻訳が正確であると仮定すると) 謎めいたものであった。彼はこう言ったのである、「アダムとエバは私たちが子供をつくるのとまさに同じプロセスでつくられた。父母の強い愛とエネルギーによって子供が受胎し、最初は胎内で、それから外で成長する。同じように神はアダムとエバを創造した。神の愛とエネルギーによって、小さなものが創造され、それが成長して、アダムになったのだ。」アダムとエバは我々が誕生と理解しているものと同じように、すなわち、生理的に誕生したのか? と質問されたとき、彼は次のように言った、「今日、赤ん坊が人間によって創造されるのと同じように、アダムとエバは神の力を通して創造された。人間は特別の被造物だったのだ。」そして、アダムとエバには地上の肉体を持つ親がいたのかと質問されると、彼は言った、「いや! 創造の源はエネルギーである。創造されるのに肉体をもつ親は必要ではない。アダムは特別の被造物であったのだ。」(付録IIを参照)

従って、アダムとエバは、我々が赤ん坊として子宮内で人生を始めるのと同じように、それぞれの人生を始めたのであるが、彼らは生物的な親がいない特別の被造物であった。

人間の創造までにどれくらいの時間がかかったのかと尋ねられたとき、文鮮明師は次のように答えた、「家を建てるのに必要なすべての材料を準備したと仮定しなさい。自分で家を建てるのに、長くはかからない。材料を集めるには時間がかかるかも知れないが、材料が準備されれば、建設自体にはそれほど多くの時間はかからない。同様

に、動物、植物および鉱物はすべて恐らく何百万年間という時間で創造された。すべての材料がそこにあった。それらの中の精髓から人間を創造するに長い時間はかからないだろう。」（付録IIを参照）

従って、アダムとエバは既にそこにあった材料で創造されたのである。1977年に李相軒先生は、これらの言葉は2通りに解釈できる、と書いた。一つの可能性は、「神は次の段階の新しい生物を、それに先立つ段階の被造物とはいかなる関連もなしに創造した。例えば、神は類人猿（サルと人間の中間的な特徴を持った動物——筆者）を創造した後、それらの創造とは何らの関連もなく人間を創造した」というものである。もう一つの可能性は、「神は前もって類人猿を創造し、それからそれらの一つに新しいアイデア（すなわち、人間のアイデア）とエネルギーを投入することによって、神は肉体的な人間を創造し、それから、それに霊人体を投入する（すなわち、生命の息を彼の鼻孔に吹き込む）ことによって、霊人体と肉体の両方を持った人間を創造した」というものである。（付録IIIを参照）

これら2つの解釈の2番目だけが、なぜ化石記録の中にサルと人間の中間的な特徴を持つ絶滅した動物が存在するか、また我々が鯨の例に見たように、生物の他の多くのグループ間に中間的な存在が、なぜ含まれているかを説明する。神はすべてを無から即座に創造したのではなく、新しい種、器官、あるいは形態を、先行するものを土台として、胚発達の青写真をアレンジし直すことによって、創造したのである。統一思想によれば、「新しい種が創造されるとき、神の力が働いてそのロゴス（設計図）に飛躍的な変化が起こる。」したがって新しい種の創造は「連続的にでなく、段階的に起こった。…神の力が作用し、そのことによってある一つの種が創造され、そのあと一定の時間が経過した。これは成長期間あるいは準備期間ともいふべき一定の期間で、その後再び、神の力が作用して新しい種が創造されたのである。」これが正確にどのようにして起こったかは分からない。しかし「この問題はやがて科学者たちの研究の成果によって解明される日がくるであろう」というのが統一思想の見解である。<sup>24</sup>

1999年に文鮮明師は、アダムにはへそがあり、母親の胎内で成長したのだ、と言って、李相軒先生の1977年の解釈の2番目が正しいことが確認された。神はその力を用いて、（類人猿と人間の中間的な特徴をもつ動物の子宮の中に）すでに存在していた材料をアレンジし直したのであるから、アダムとエバは特別の被造物であり、しかもそれぞれがへそを持っており、胎内で胎児として成長したのである。<sup>25</sup> 神の介入があったのだから、アダムとエバを生んだ動物は彼らの代理の親であって、生物学的な親ではなかったのである。

誰が最初の人間の幼児を育てたのかと質問されたとき、文鮮明師は次のように言った、「神自身が育てた。彼らは非常に尋常でない環境の中で育てられた。神のエネルギーと力の故に、神はそのようにすることができた。正確にどのようにしたかはわからない。植物でさえ、神が創造した自然環境の中で種から木へと成長するものだ。」（付録IIを参照）だから、神ご自身がアダムとエバを育てたことになるが、それは神が創造した自然環境を手段としてであった。肉体的にはほとんど人間であった動物がアダムとエバを誕生させ、それからその最初の人間の幼児が必要としたであろう栄養と保護を与えたのである。アダムとエバが自分で自分の面倒をみるようになることになると、そのような動物はもはや必要とされなくなり、絶滅するようになったのである。李相軒先生によると、彼らは「建物を建設した後に」壊される「足場」のように、アダムとエバの創造において「二つの段階の間の媒介ないし橋渡しとしてのみつけられた」というのである。<sup>26</sup>

1965年、「人間はどのように神の似姿としてつくられるのか？」と問われて、文鮮明師は、「体は心に一致するように、心は神に一致するように創造される。…肉体的および霊的に全存在が神の似姿に創造される」と答えた。(付録IIを参照) 従って、統一思想は、導くものがない自然の過程からたまたま出現した肉体に、神が人間の魂を付け加えただけという、キリスト教徒間で信じられている見解とは一致しない。

神は最初の人間の創造に関与しただけでなく、すべての人間の誕生にも関与しているのである。統一思想によると、人間は「神に直接的に似せて創造されたが、他の被造物は神に象徴的に似せて創造された。」

したがって、「人間の個性は神でなくその人間の親に由来するというのは真実ではないのである。親の一定の特徴は子供に受け継がれるが、親のユニークな特徴のすべてを相続するわけではない。のみならず、人間は親が持っていなかった新しいユニークな特徴を持って生まれてくる。それ故、神はある人間を創造する場合、その親のユニークな特徴を材料として用いるが、神が思い描くユニークな特徴にも従って、その人間を創造する、と結論しなければならない。」<sup>27</sup>

それで、神と人間の親の両方が、子供の精神を創造するのに関与しているのである。そのように考えることによって、統一思想は、キリスト教神学の古典的なパラドックスである靈魂の起源の問題を解決する。初期のキリスト教神学者の中には、各人の魂は神が直接に創造する、さもなければ、神の似姿に創造されるとは言えない、と主張した者もいた。この見解は、「靈魂創造説 (creationism)」と呼ばれた。(現代のダーウィニズム論争における聖書的創造論 (biblical creationism) と混同すべきではない。) 他の神学者は、子供の靈魂は人間の両親によって作り出される、さもなければ、アダムとエバの墮落によって導入された原罪を相続しないであろう、と主張した。この見解は、「靈魂伝遺説 (traducianism)」と呼ばれた。<sup>28</sup>

しかし、統一思想によると、子供はその靈魂を人間と神の両方から得る。「靈魂創造説 (creationism)」と「靈魂伝遺説 (traducianism)」は、これに関する相違しているが補完的な二つの面なのである。(図6)

#### 図6. 靈魂の起源

G: 神 ; F: 人間の父親 ; M: 人間の母親 ; C: 子供

- (a) 靈魂創造説 (Creationism) : (靈魂は神によって直接創造される)
- (b) 靈魂伝遺説 (Traducianism) : (靈魂は子供の両親によって生まれる)
- (c) 統一主義 (Unificationism) : (靈魂は神と子供の両親によって創造される)

#### 4. 結論

ダーウィニズムは以下の主張から成る。

- すべての生き物は、一つ又は少数の起原的生命体の子孫である。
- それらは導くものがない自然のプロセス——主としてランダムな変異(遺伝子の突然変異)に働く自然選択——によって変化してきた。

しかし、こうした主張は科学的な証拠によっては支持されない：

- 化石や生きた生物の間の類似性（相同）は、「変化を伴う血統的下降」を確立することはできない。相同は、共通の先祖でなく共通のデザインの産物であると十分に考えられる。
- 現存する種の内部での変化（小進化）の証拠は豊富だが、変異や自然選択が新しい種を生み出した確認された例はなく、まして新しい器官や体の形態を生み出したという（大進化の）例は存在しない。

ダーウィニズムとは対照的に、統一思想は次のように主張する。

- 人間は導かれない自然のプロセスによって偶然に生み出されたのではなく、神の似姿として意図的に創造されたものである。
- 神は人間を最初に構想したが、すべてを人間のために準備した後で、最後に人間を創造した。その結果、生命の歴史は、最も単純な生物から次第に人間に近い被造物へと進行するのである。

最初の人間の起源について可能性のあるシナリオは以下の通りである：

- アダムとエバは赤ん坊として人生を始めたが、他の動物から生物学的に降ってきたということではない。神は、類人猿と人間の間の中間的な特徴をもつ絶滅した動物の胎内の材料から、人間を創造した可能性がある。その後、そのような生物が最初の人間の幼児に栄養分と保護を与えたのかも知れない。

人間の起源に関する統一思想の見解は、我々が生命の歴史について知っていることについて、少なくともダーウィニズムと同じくらい首尾一貫しているし、導かれない自然のプロセスが新しい種や器官や体の形態を生み出すことができないことについては、ダーウィニズム以上に、我々が知っていることと首尾一貫している。人間の起源や、すべての人間の霊魂の誕生における神の役割を説明することによって、統一思想は、神の下での世界平和の、科学的かつ哲学的な基礎を提供しているのである。